

静かさというのはいつもその内に恐ろしさを秘めているものだ、と常々思う。

2011年3月、状況の理解も追いつかないまま、ただ茫然とテレビで眺めたあの福島の土地に降り立った時、感じたのは劇的な感情でもなんでもなく、ただその空間の不思議な静かさだった。静かさの原因というのは何も人が少ないことだけが原因ではない。自然が豊かなところには自然の鳴き声が響くように、何かしらの豊かさを備えた場所というのは、必然的ににぎやかになる。静か、というのはそこがすっかり貧しくなっているということを暗に示している。

第一の静かさの象徴は廃墟だった。特に地域のよりどころであったろうファッションセンターは、ガラスが飛び散り、当時のまま放置された服や靴たちが見る影もなく土埃にまみれている。しいんという音が染み入るような風貌をしていた。はじめは、そこにいた人たちのにぎやかな会話を想像して、現在とのギャップに静寂を感じ取ったのだと思っていた。だが、次第にその廃墟は静寂そのものなのだと感ずるようになった。廃墟は自らの過去を雄弁に語らない。ただ泰然として自らを見せつける。われ静かなり、と。いったいこれは何なのだろうか、と考えているうちに、この廃墟というのは大地に深く根を張る植物のような力を見せているのだと思うようになった。彼は自然に対する人工物の敗北のさまを象徴するものでもなければ、過去の生活の記憶を導き出すような語り部でもなく、その大地のエネルギーを存分に活用して災害の後まなお立ち続ける存在に見えた。彼は大地の象徴だったのである。

第二の静かさの象徴は汚染土壌たちだった。放射線を含むそれらの土壌は、大地の表面から削り取られ、専用の袋に入れられたのち、中間貯蔵施設にて保管される。土というのは大地の一部であり、そこに育つ植物から植物を喰らうあらゆる動物たちまでを含めた生態系の根本にあるものだ。それが汚染されたという事実が、福島で生産された農産物に対して奇異の目を向けさせることになったことは今だ記憶に新しい。2011年のあの日まで人々の生活を支えていたはずの土壌は、放射線に汚染され、またその土地に人々が戻ってくるために削り取られ、あらわになった新しい地面とは対照的に、静かに袋に包み込まれている。

福島という場所は恐ろしいくらい静かだった。だがその静かさは、恐ろしさも備えつつ、その場所が再生するための力強さを表現しているようでもあった。震災から10年以上たった今も、あの土地はまだ復興の途上にある。だが私も含め、現状復興がどのくらい進んでいるのかということも知らなければ、これからあの場所がどのようになろうとしているのかを見つめている人はどのくらいいるのだろうか。福島という場所の静かな生命力の在り方は、どれだけの災害が起ころうと持ちこたえる大地の力強さと、その大地の力強さを忘れ去ってしまった私たちの罪深さに対して訴えかけているようだった。